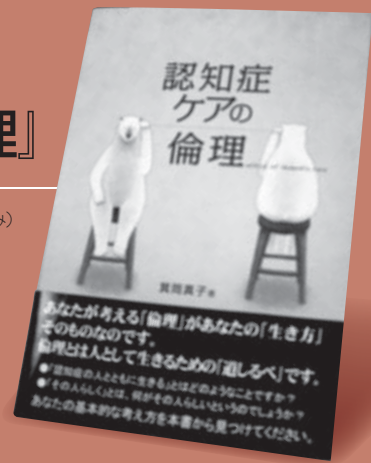


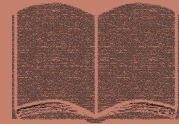
# 『認知症ケアの倫理』

●ワールドプランニング ●箕岡真子 著 ●定価 2,100 円 (税込み)



認知症の人たちと共に生きる道すじを考える

## 今月の3冊 BOOKs



評 宮武 剛 (白鳥大学大学院教授)

重度のアルツハイマー病の女性は、得意の手芸が無理になり、ひとりでは着替えもできなくなつた。施設のスタッフが手伝おうとすると、怒鳴ったり叩いたり。「自分たちが我慢するほかない」「わがままで」とスタッフの対応は分かれる。

しかし、この女性は元小学校教諭で子供たちを教える立場だったのに、権限を奪われ、子供扱いされることに反発していたのだ。手芸はできなくても「教えてください」「着替えも」「いっしょにやらせてください」。そう接することで穏やかな日々が戻った。

認知症によって人格が、抜け殻になるといった誤った考え方は「なにもすることがない」態度になる。

反対に「なにもできないので保護しなければ」と本人を無視したケアがなされてきた。

著者は、そんな現状を多くの具体例で示しながら、「なにかをする」のではなく、「彼らと共に在る」ことから「認知症ケアの倫理」を探し求めていく。

「徘徊する認知症の人に抑制帯をつけてイスに縛りつけておくことは尊厳に反しないのでしょうか」「多目の睡眠薬で強制的に眠らせつつか」「食事や内服薬を拒否する人に、栄養失調になるから無理やり食べさせることはよいことでしょうか」。

福祉施設で、病院で、家庭でも、直面する日々の悩みに答えてくれる。

もちろん回答は1つではない。それぞれの人格と症状と環境に合う対応になる。

内科医としての臨床経験と東大大学院・客員研究員としての学びが現場と新たな学問分野を結び付けている。

とりわけ認知症に対する終末期ケアの在り方を問う第8章は考えさせられる。嚥下困難な患者に胃ろう(PEG)を設けることは是非、末期がん患者とは異なる緩和ケアの在り方、自己決定が無理になった際の代理判断の方法。さらに米連邦最高裁が「死ぬ権利」について下した初の判決「ナンシー・クルーザン裁判」を初め判例も豊富に紹介され、著者の学識と心配りの深さを教えてくれる。

## 『緩和医療』

——痛みの理解から心のケアまで——

- 東京大学出版会
- 小川節郎ほか 著
- 定価 2,520 円（税込み）



その語源をたどるとラテン語のパリアム (pallium) に行き当たる。意味は、古代西洋のマントやコートといった暖衣であり、寒さをしのがせることから転じて苦痛軽減、さらにはそこから派生して、こんにちの疼痛緩和の医療を指す「パリアティブ (palliative) ニュース」になる。

従来、疼痛緩和は治療を打ち切っ

た後、終末期の処置とみられがちだったが、高齢社会の進展および医療技術の進歩にもない、その意義が増している。壮年期までに傷病が老年期における療養生活を経て、天寿をまっとうしている。そうした時代にあつて、世界保健機関 (WHO) も定義するよう、緩和医療は「生命の質を向上させるアプローチ」とされ、むしろ病氣治療の全段階での実施が望ましいと理解されてきた。これを受けて日本でも 2007 年

「緩和医療」は、英語のパリアティブ・ケアの訳で、

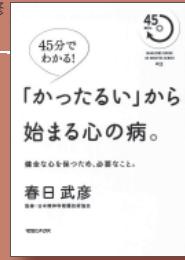
「緩和医療」は、英語のパリアティブ・ケアの訳で、

評 | 中島裕明 (倉橋田大学非常勤講師)

態・自殺願望などの症状も多くみられるが、緩和医療によってその割合は半減する。その結果、医療スタッフはもとより、患者の家族の負担は激減し、よりコミュニケーション豊富な患者中心の医療へと近づくことになる。いまだ患者の主観的な痛みを客観的に評価する難しさや、ここ 10 年で倍増したといえる全国の専門病棟で約 4000 床といった規模には拡充の余地がある。しかしかわゆる在宅ホスピスとの連携を視野に入れるなどして、この分野の発展が期待される。

## 『「かったるい」から始まる心の病。健全な心を保つため、必要なこと。』

- マガジンハウス
- 春日武彦 著 日本精神科看護技術協会 監修
- 定価 840 円（税込み）



本書は、メンタルヘルスの重要性和維持方法について、丁寧に分かりやすく書かれた書物である。著者

は、精神科の医師として長年、臨床に携わってきたおり、豊かな経験に裏打ちされた言葉は強い説得力を持つている。著者は、メンタルヘルスの維持、改善のために必要なことは、自分の状態を言語化して客観視すること、そして、物事がすぐには解決されないという事実を耐えることのできる力をつけることであると主張する。なぜならば、自分の状況を言語化して他者に伝えることは、自らの問題と冷静に向き合うことにつながり、また状況のあ

いまいかに耐える力をつけることは、現実性の低い不安な環境において生き抜くことを容易にするからである。さらに著者は、人生において自分自身を支える力となる重要な心のあり方として、自己肯定、自制心、他者の状況や気持ちに対する想像力を挙げる。その理由は、自己肯定によって自暴自棄になることを防ぐことができ、自制心によって自分や他人を粗末に扱おうような行動を抑えることができ、他者の立場を思いやる気持ちを持つこと

評 | 吉田しおり (龍谷大学非常勤講師)

は、他者、ひいては自分自身を大切にすることにつながるからである。著者は、この 3 つの力が、人間の精神状態に強い影響を与える無力感の克服に大きな力を発揮するため、3 つの力を伸ばしていくことが精神の健康のために重要であると主張する。

健康な精神を維持し、また改善していくためには、どのように自分の心と付き合えばよいのかの大切な示唆に富む書物である。